病防第１２７号
平成３０年１月２９日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

イチゴハダニ類の発生状況と防除対策（技術情報第１２号）について（送付）

このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考としてご活用ください。

記

１月のハダニ類の発生は平年よりやや少ないが、一部に発生が多いほ場もみられます。今後気温の上昇に伴い、増加することが予想されますので、収穫盛期前の２月中に、下葉かぎ後などに防除を行いましょう。

１　発生状況

（１）１月の巡回調査における寄生葉率は9.0%（平年19.7%）で、１０～１２月に引き続き平年よりやや少ない発生であったが、平年、前年と同様に増加傾向を示している（図１）。また、一部発生が多いほ場もみられる。

（２）福岡管区気象台が１月25日に発表した九州北部地方の１か月予報によると、気温は平年より低い予想である。ハダニ類の増殖には適さないが、平年に比べ曇りや雨、雪の日が多い予想で、薬剤防除を行える日が少なくなると考えられる。また同気象台が１月24日に発表した３か月予報によると、３月、４月は降水量は平年並か少なく、平年に比べ晴れの日が多くなる予想で、ハウス内が日中高温になり、ハダニ類は増殖しやすくなると予想される。

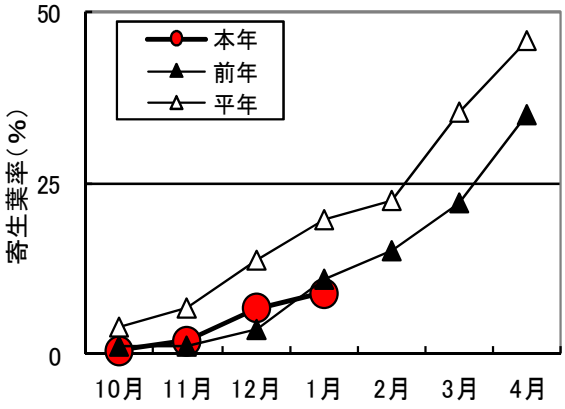

図１　巡回調査におけるハダニ類の寄生葉率の推移

２　防除対策

今後は気温が上昇しハダニ類の密度が高まるが、３月以降は収穫盛期のため防除が遅れがちとなりやすい。したがって、２月中に以下のとおり防除を行い、密度を増加させない。

（１）薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。かいだ葉は、ポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。

（２）薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。

（３）使用できる殺ダニ剤が少ない場合には、気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が無いため、７日程度の間隔で複数回散布する。なお、果実に薬害を生じやすい剤もあるため、ラベルなどで使用上の注意事項を確認した上で使用する。

（４）未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。なお、親株ほ（育苗ほ）についてはハダニ類を持ち込まないために、管理作業は最初に行う。

（５）カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用しハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。

（６）薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないよう使用する。

（７）農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守して農薬の安全使用に努める。

熊本県農業研究センター　生産環境研究所
病害虫研究室　予察指導係
（病害虫防除所）
担当：坂本、斉藤　　TEL：096-248-6490